



2017年4月15日

資料館通信 第71号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮1-2-11 TEL 049-261-6065
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央2-19-5 TEL 049-263-3111

なつかしのぬくもり～湯たんぽとあんか～を開催中！

上福岡歴史民俗資料館（5/14（日）まで）

資料館では、毎年小学校3年生むけの「昔のくらしと昔の学校」展を1～3月に実施しています。そのなかで明治から昭和時代にかけての昔の生活用具をとりあげてきました。そのうち、暖房用として、身近な道具だった湯たんぽとあんかにスポットをあて、これらの歴史を紹介するとともに「昔のくらしと昔の学校」展のように世代を超えた交流の場とするため、上福岡、大井両館に寄贈された湯たんぽを集成して、こたつなどの暖房用具を加え、ご覧いただく企画展を開催します。

最後に、展示にあたりまして貴重な写真や資料等及び製品情報をご提供下さいました徳川美術館(DNPartcom)、日光山輪王寺、パナソニック株式会社にお礼申し上げます。また、伊藤紀之先生には展示パネルを一部監修していただくとともに写真をご提供いただきました。記して厚く謝意を表します。

湯たんぽの由来

湯たんぽは、漢字で「湯湯婆」と書くとされているが、もともとは「湯婆(たんぽ)」と呼ばれていた。「たんぽ」の語は、中国語を語源とする語で、医療具であるとともに、関西では酒の燗(かん)をするものという意味もつけ加わり、遅くとも江戸時代に酒器を転用する例も確認されている。湯たんぽが最初に文献に現れるのは、文明16(1484)年の『温故知新書』と臨濟宗の僧侶季弘(きこう)大(だい)叔(じやく)の日記『蔗軒(さげん)日録』とされ、季弘大(だい)叔(じやく)が、足の冷えのために使った記述がある。江戸時代初期には俳諧(はいがい)の季語にもなった。湯婆に湯の字が加わって、「湯湯婆」となったのは、陶製の湯たんぽが普及し始めた明治20年代頃と考えられる。<<参考>>濱中 2011、伊藤 2007, p. 26, p. 28、伊藤 2010, p. 15

湯たんぽの歴史

湯たんぽは、室町時代に中国から伝わりましたが、現存する湯たんぽで最古のものは、岐阜県多治見市小名田出土の「黄瀬戸織部流し湯婆」である。織部の緑の釉薬(ゆうやく)は原材料が銅であり、たため、かなり高位の身分の人物の持ち物であったろうと考えられている。

伝世品としては、徳川家康の遺品である「桑木地(くわきじ)葵紋(あおいもん)散蒔(さんまき)絵湯婆(ゑたんぽ)」が知られ、江戸時代中期には、『和漢三才図絵』に記述されている箱状の湯たんぽもしくはそれに近いカステラ状の湯たんぽが知られている。陶磁器製の湯たんぽは、文政年間(ぶんせいねん)の年号が記された染付磁器の湯たんぽがあるが、本格的に作られるようになったのはヨーロッパから輸入された湯たんぽの影響を受けた明治時代以降である。このように戦前にも陶磁器製の湯たんぽはありましたが、戦時中は金属供出が推奨され、トタン製の湯たんぽの代用品の陶製湯たんぽが盛んに生産された。<<参考>>濱中 2011、伊藤 2008、伊藤 2010



黄瀬戸織部流し湯婆(伊藤紀之氏
写真提供 伊藤 2010 図1) ※転載不可

幕末になると染付けの直方体状の磁器製の湯たんぽも出現します。しかし、何れも一般的なものではありませんでした。明治中期より、西欧の湯たんぽの影響を受けた円筒形の陶器製湯たんぽが、日本各地の窯場で作られました。大正時代になると、ねじの栓がついた楕円形で波型のトタン製湯たんぽは軽く、使いやすく広く普及していきます。ところが昭和10年以降、国策により金属節約のために陶磁器製で、型で作られた湯たんぽに変わります。大戦後は再び、トタン製の湯たんぽが復活してきました。(伊藤)

<<参考>>伊藤 2008, pp. 69-72 伊藤 2010, pp. 16-18

湯たんぽの分類

湯たんぽの分類については、濱中進氏の助言により大田区立郷土博物館で開催された『冬のぬくもり、エコ暖房 湯たんぽ』展(平成23年10月~12月)において詳細な分類がなされている。この企画展においてもその分類を踏襲しています。<<参考>>濱中 2011, pp. 8-10

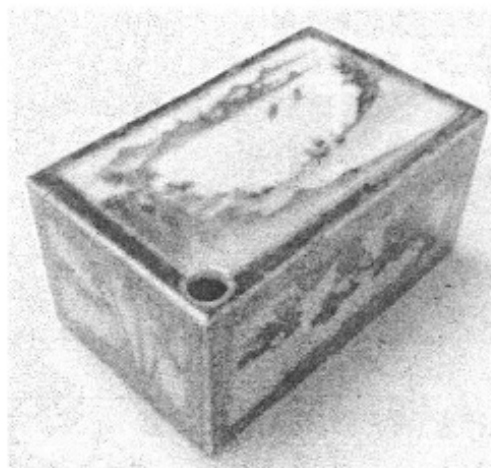
湯たんぽの形状分類(明治時代以降)

材質		形状
金属製	トタン製	カマボコ形、波付き亀の子形など
	真鍮製(薄板、肉厚)	カマボコ形、波付き亀の子形
	銅製(薄板、肉厚)	楕円柱形(把手付き、把手なし)、カマボコ形(把手付き、把手なし)、亀の子形(波付き、波無し)など
	アルミ製	カマボコ形、亀の子形(波付き、波無し)
	その他(薄鋼板製、非鉄金属製など)	亀の子形(波付き、波無し)など
陶製	在来品形	砲弾形、カマボコ形、変形
	代用品形	カマボコ形、亀の子形
ゴム製	水枕形、円形水枕形など	
プラスチック製	波付き亀の子形、ドーナツ形、円形(把手付き、把手なし)など	

市内の湯たんぽ(寄贈品)一覧

陶製	カマボコ形	在来品形	大井	1		
			上福岡	2		
陶製	カマボコ形	不明	大井	2		
			上福岡	2		
		代用品形	大井	2		38の陽刻あり。10の陽刻あり。
			上福岡	0		
陶製	亀の子代用品形	大井	1	36の陽刻あり。		
		上福岡	2	2の陽刻あり。1点万古焼。		
トタン製	波付き亀の子形	大井	1			
		上福岡	1			

について「岐」「瀬」「万」などの略称と窯元を示す番号や商標がつけられた。これによりそのやきものがどこの誰が生産したのかがわかるようにしていた。ただし、生産地によって美濃など記録が豊富で詳しく判っている場所とそうでない場所とのばらつきがある。



染付け磁器の湯たんぽ(文政年間製) 19世紀前半, 1818~30年頃の所産。伊藤紀之氏提供(伊藤 2010, 図17)

戦時下の湯たんぽとあんか

戦時中には、金属不足から陶器製のもが奨励され、産地ごとに生産者(窯元)を特定する生産者別標示記号(一般的には「統制番号」という名称で知られる)がつけられた。「統制番号」は、昭和15年8月ごろから昭和21年ごろの間に生産されたものにつけられ、この時期のやきものには、生産地に

黄瀬戸織部流し湯婆

多治見市小名田出土、古陶園、加藤景嗣氏所蔵。現在確認できる日本最古の湯たんぽである。独特な形状は、室町時代からのあんかの形状に近く、半球形の素焼きのあんかの形状を模して、型を包むように手ひねりで粘土ひもを巻上げて作ったと思われる。

黄瀬戸釉は、室町時代末～桃山時代に美濃焼で用いられた独特な釉薬であり、しばしば織部釉の先駆となる銅緑釉を用いた文様がつけられた。

<<参考>>伊藤 2010, pp. 13-15

桑木地 葵紋散蒔絵湯婆 (徳川美術館蔵)

伝世品としては確認できる最古の湯たんぽであり、徳川家康が使用したと伝えられる。桑木で作られ、脇息のようにもたれかかって使われた。内部は錫板で内張されている。表面には20の葵紋が描かれている。葵紋の向きが一樣ではなく、幕府成立初期の作と考えられる(伊藤)。

桐などの木製、銅製、陶製などの酒器に湯を入れて身体を温めたという記録もあり、湯たんぽのように使用した可能性のある酒器もみられることから将軍のために特別に豪華な湯たんぽをつくったと考えられる。

<<参考>>大田区立郷土博物館 2011, p. 13、伊藤 2010, pp. 15-16

犬型銅製の湯婆

日光山輪王寺宝物殿所蔵、日光輪王寺に伝わる三代将軍家光の遺品とされる湯たんぽと考えられる。左耳が左回しの外ねじではめ込まれている。江戸初期にはねじは一般的でなく、海外からの渡来品、または献上品と考えられる。表面は鍍金されていた跡が見られ、宝物に相応しい豪華な湯たんぽである。寝具の中に入れて使用したと考えられる。

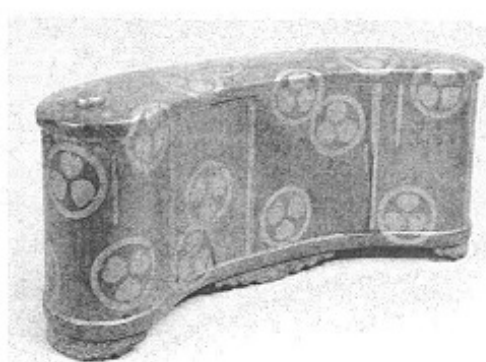
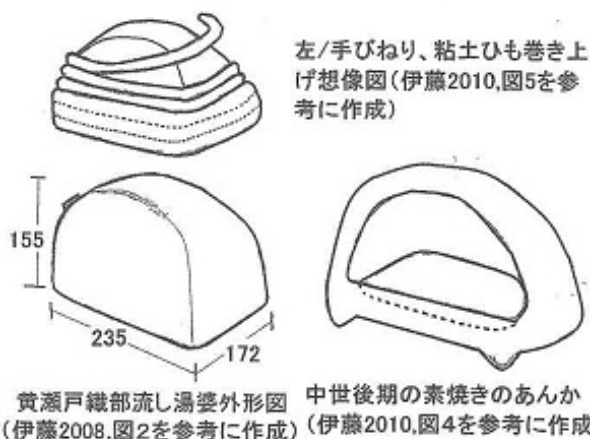
<<参考>>大田区立郷土博物館 2011, p. 14、伊藤 2010, p. 16

江戸時代中期から昭和初期の湯たんぽ

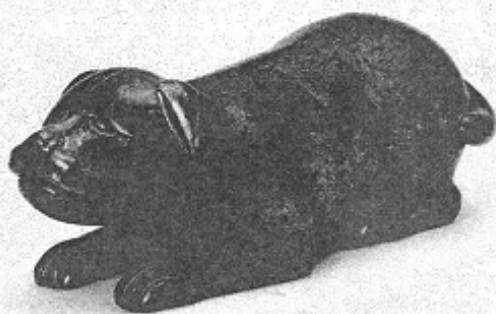
江戸時代の湯たんぽは、銅という錆びない高価な素材を使用し、暖を取るために湯を使うことが庶民階層には難しく、身分が高い人々しか使えませんでした。『和漢三才図会』には、「銅で作られ、枕ぐらいの大きさで、小口があり、湯を入れ、腰や足を暖める。」と記載されています。

江戸時代の銅製湯たんぽは、鍛金加工で、銅の塊を打ち延ばして製作され、丁寧に製作されていても銼目があるのが見て取れます。

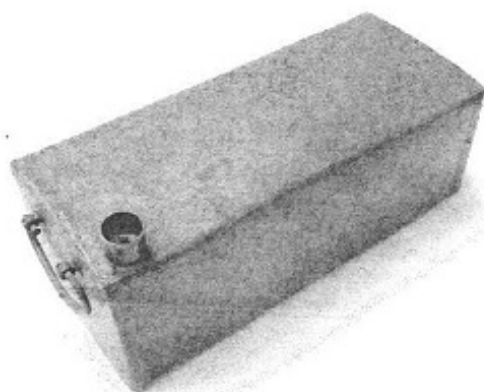
銅製湯たんぽ(岐阜県で採取、江戸時代中期、伊藤 2008, p. 71)。伊藤紀之氏写真提供。



桑木地葵紋散蒔絵湯婆 徳川美術館所蔵
©徳川美術館イメージアーカイブ/DNP artcom※許可なく複製、転載を禁じます。



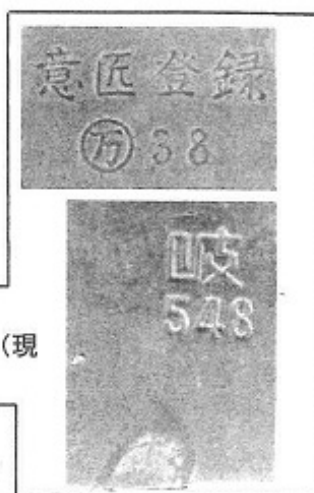
犬型銅製の湯婆 日光山輪王寺提供。許可なく複製、転載を禁じます。



陶製代用品形湯たんぽに刻まれた統制番号（生産者別標示記号）及びそのように推察される番号



陶製代用品アンカ裏面にみられる生産者別標示記号
（右上/万古焼、右下/美濃焼、土岐津陶磁工業組合加藤鑛三（現多治見市高田）



行火（あんか）の由来と歴史

行火（あんか）は、「火を使う」という意味の中国語が語源である。最も古い形態は、平安時代に、桐の木の中をえぐって、裏に真鍮や銅などを張り、火入れを入れ、裏側に金属板を張った蓋をした桐火桶である。主として手あぶりとして使用された。室町時代に「バンドコ」と呼ばれる蓋のついた火入れが手や足を暖めるのに用いられ、鳥根県の尼子氏の富田城からも出土している。この時期の素焼きのあんかが、黄瀬戸の湯たんぽの形状にも影響を与えた。

江戸時代になると、瓦製や石製のもので、一人用の暖房具としてふとんをかけて使用するようになった。代表的なものがねこあんか（ねこごたつ）と呼ばれる。その後、寝具にいれるあんかが、あんか灰を用いたり、石綿の中に豆炭を入れ、金属板でおおった豆炭あんかが、昭和時代まで用いられた。電気あんかは、「電気行火」の名称で、1913（大正2）年に、東京芝の下羽電気商會が製造発売を行なったことが知られている。<<参考>>小泉 1975, p.159、伊藤 2010, pp. 13-

15、Anthropithecus Electrojin2015/1, p. 40

こたつ（炬燵）の由来と歴史

こたつ（炬燵）は、「火燵」「火圍」「火榻」などの表記があり、燵、圍が国字であって、中国語にはないことから日本での造語と推定される。起源は、室町時代の中ごろからと思われ、禅宗の寺院で使用され、書院造の部屋や茶室の一部に設けられた炉の上に木のやぐらを置いて着物の布で覆ったとされる。掘りこたつが一般の家庭で使用され始めたのは江戸時代・元禄期（17世紀末）ころで、木綿の布団が普及し始める時期に一致している。置きこたつも、ほぼ同時期に、火鉢を木製の箱や木組みのやぐらにいれたのがはじまりと思われ、「住みつかぬ旅の心や置炬燵」という元禄期の俳人松尾芭蕉の句にも登場する。

<<参考>>小泉 1975, pp.158-159、岩井編 1998, p. 32、大西 2016, p. 46

電気こたつの出現

最初の電気こたつが発売されたのは、1924（大正12）年とされ、『家庭電気機器変遷史』に記載がある。1927（昭和2）年に、いずれも東芝の前身である芝浦製作所の『芝浦レビュー』に600ワットの電気こたつ、東京電気株式会社の『マツダ新報』に60ワットの電気こたつとやぐらに入れる電気こたつが紹介されている。現在のような下向きヒーターがやぐらの上についた電気こたつが登場したのは、1956（昭和31）年に東芝によって開発、発売された42センチ角やぐら、300ワットのKYA-32（当時2950円）、51センチ角やぐら、400ワットのKYA-41（当時3800円）が、最初である。<<参考>>大西 2016, pp. 48-54
一方で、あんかのように使用する電気コタツもナショナルから昭和1965（昭和40）年に発売された。

カイロ（懐炉）の歴史

カイロ（懐炉）は、腹や胸をあたためる道具として、江戸時代に、金属製の容器に、木炭の粉末とワラ、ヨモギの灰をまぜたものを入れて点火し、『西鶴織留』などの文献に登場する。その後ハッキンカイロが昭和初期以来普及したが、昭和50年代に活性炭の粉末が空気に触れて酸化反応を起して熱を発することを利用した簡便な使い捨てカイロが登場すると次第に使われなくなった。

<<参考>>小泉 1975, p.161、岩井編 1998, p. 34、小林編 2004, p. 139



ねこあんか（ねこごたつ）

豆炭アンカー



豆炭（熱せられて、赤い状態）



置きこたつ

（文責：柳澤健司）